「前半ヨシ 後半ヨシ 合せてマチガイ」

岡田章の軌跡

岡田さんのいる風景 I

小生元氣

悼惜

「敬愛する岡田章先生」への手紙

吉田章宏
日比谷高校昭和28年卒

拝啓

岡田章先生、その後お変わりありませんか。私も、何とか元気に過ごしております。

さて、先生の追悼文集に収めていただくことを願って、手紙の形を借りた以下の文章を、本年六月に書かせていただきました。

日比谷映画劇場での『ダンボ』の思い出

岡田章先生、しばらくご無沙汰しております。そちらの世界でのご生活はいかがですか。思い起せば、先生との出会いは、昭和二十五年に私が日比谷高校に入学し、一年生の十三ルームで解析Ⅰを教えていただいた時に始まったのでした。教室でお教えいただいたのは、その一年間だけでした。不思議なご縁で、四十数年間の「淡交」が続くことになりました。荒又秀夫・末綱恕一の『微分積分学』、清和寮のお部屋、東大駒場からの私の進学先の決定、京都・奈良に上条文夫君と連れて行っていただいた先生の愛車ナッシュ、紫色のハンド・バッグ、同窓後輩の衣笠善雄君のこと、原彪先生(元社会党代議士)のこと、定年退職後についてのご忠告、言問だんご、駒形どぜう、いろは寿

司……。思い出は尽きません。

ふと、あのディズニーのアニメ映画『ダンボ』を見に、日比谷映画劇場に行った時のことを思い出しました。あれは、昭和二十九年（一九五四年）の春でしたね。私が十九歳、浪人一年目の東大入試に失敗した直後で、失意のどん底にいた時でした。「映画を見に行こう」とわざわざ訪ねてみえて、誘って下さったのでした。

一人陰鬱な気分で籠っていた私は、憧れの岡田先生と二人で晴れた暖かな春の日の銀座を歩けるということが、それはそれは嬉しくて、控えている二年目の浪人生活の暗さも吹き飛ぶ思いでした。空席の多い昼間の劇場の二階の席で『ダンボ』を見ながら、身体を揺すってお笑いになる先生のお姿に、数学では厳しい先生の人間的な優しさを深く感じ、慰められ励まされたのでした。

この世で、四十数年の長きにわたって、導き、慰め、励まし、忠告を与えて下さった先生に心からの感謝を捧げます。またあの世で、お目にかかれる時を楽しみにしております。

一九九六年六月

追伸

以上の文章を、文集のお世話をして下さっている、かつての十三ルームの同級生だった古寺博さんを通じて、先生の追悼文集の編集委員会にお送りしたのは文面にもありますように、一九九六年六月のことでした。それからしばらく経って、追悼文集のお世話係の一人の東郷茂彦さまから、直接、私の自宅にお電話があり、編集委員会の意向でスペースを十分に用意するから、岡田先生による私の「思いのたけ」を心残り無く書いて欲しい、とのご依頼がありました。さまざまな予定が

ありましたために、お引き受けすることを一旦はためらったのでしたが、電話を通じて伝わる熱意に動かされ、また、先生と私の一生を通じての深い縁（えにし）を思い、進んで書かせていただくことにいたしました。既に書いた『ダンボ』の手紙も、素直に私の思いが出ていて、私には捨て難く思われました。

それで、以下は、その「追伸」として、やはり、先生への手紙の形を借りて書かせていただくことにいたします。いずれ、そちらの世界に私が参りまして、先生と再会した時に、ご一緒に思い出話を楽しむことを想像しながら、以下の手紙を書かせていただくことにします。

改めて書き記すまでもないことですが、先生と初めてお会いしたのは、昭和二十五年四月、あの十三ルームの「解析Ⅰ」の授業でした。先生は、教室には教科書もノートもお持ちにはなりませんでしたね。お持ちになったのは、当時日比谷の先生方がお使いになっていたあの白色で縦に長細い出席簿、あれだけだった、と私は記憶しています。数センチ角の小さなメモをお持ちになり、それだけをご覧になって、黒板一杯に、当時の私にはえらく難しく入り組んだ文字式を展開なさるのをみて、びっくりしたものでした。あのメモには、何が書いてあるのだろうか、と好奇心を持ったことを覚えています。

ノート無しの授業に秘められた深い意味には、大分後になって、現象学の始祖フッサールの『幾何学の起源』を読んだ時に、はたと思い当たったことでした。先生は、ノート無しで、その場で最初から考えながら数学をお教えになることで、数学をその場で生き生きと再創造、再活性化してい

らっしゃったのですね。既に考え終わってしまった思考の、言わば死んだ痕跡や記録としてのノートを黒板にそのまま書写することには、その時点での数学の「空洞化」の危険があり、恐らく項目だけが書いてあるあの小さなメモだけしか見ないということには、「空洞化」の危険を防ぐという意味があったのだ、と思い当たったのでした。

さて、あの当時、公立の新制中学（千代田区立今川中学校）を出たばかりの私は、旧制都立第一中学の伝統に立つ高い水準の授業に畏怖の念を抱いていました。中でも、先生のお授業は際立っていました。級友が名簿順に「新井、荒川、安藤……」と当てられ、席で立ちます。答えられれば無事にすぐ座れる。が、適切に答えられないで顔を真っ赤にして立っていると、しばらくして先生が、重重しく厳かに「座って」とおっしゃる。教室でのあの「儀式」の経験は、気が小さくしかも鈍才だった私には忘れることができません。いつも、一時限に二、三回は順番が巡って来たのではなかったか、と思います。自分の名前が呼ばれる順番が次第に近づいてくる。私に当たる時には、先生の質問がちょうど運よく私に答えられるような易しい問いでありますように、と祈るような気持ちで、胸をどきどきさせていたことが、昨日のことのようにありありと思い起こされます。

先生の、フランス・パリのエコール・ノルマル・シュペリユールの話、群論のガロアのお話も印象的でした。私は、当時出版されたばかりのガロアの伝記小説、インフェルト著（市井三郎訳）『神々の愛でし人』を愛読し、密かに、ガロアに憧れたりもするようになりました。いえいえ、もちろん、恋愛事件や決闘事件のガロアにではありません。弱冠二十歳で後世に名を残す素晴らしい業績を挙げた数学の天才ガロアにです。当時、家が貧乏だった私は、数学なら紙と鉛筆だけで素敵な仕事ができる、ということにも憧れたのだと思います。

教室での先生のご様子が、今、いろいろと思い起こされてきます。長髪を手で梳き上げるご様子。先生のお書きになる特徴のある書体の文字、ａ　ｂ…やｘ　ｙ…、そして漢字とかな文字。いつもお召しになっていた質素な黒い背広。学生時代からのものかとさえ思われ、一生変わらなかった黒丸縁のメガネ。哲学者・西田幾多郎がかけていたのに似たメガネでした。のっしのっしとお歩きになる重みのある靴。その歩調……。

それから、ほとんど毎回の授業の初めに、藁半紙の四分の一ほどの用紙を用いて行われた十分間程の小テスト。次の授業時間で、私の拙い答案は、途中に赤ペンで横に線が引かれ、線の右端には小さな丸が記入されて返されました。線の所までは正しいという印でした。先生が、実にていねいに見て下さっていることを感じ、毎回緊張もしました。名を呼ばれ、短評が記入された答案を、一段高い教卓の所まで行って受け取る時の興奮とささやかな喜び……。あの頃の日々が、鮮やかに甦ってくるようです。

教室では先生に教えていただかなくなってから暫くして、いつだったか、偶然お目にかかった時、先生は「見てあげるから、持っていらっしゃい」とおっしゃいました。そのお言葉に甘えて、私は、ルーズ・リーフの表面に問題を写し、裏面に答案を書いたものを、あのやや薄暗かった職員室の通路に近い側の先生の机の上に置きに行くようになりました。そして、先生に見ていただくことが私の勉学の励みになりました。先生が赤インクのＧペンで添削をして下さる、という懇切なご指導は、どの位続いたのだったでしょうか。今思えば、先生にとってあの添削指導は大変なご負担となっていたに違いありません。そのことが、今の私にはよく解ります。しかし、先生は、一度たりともいやな顔をなさらずに、忍耐強くご指導下さいました。敬愛する先生に認められたいという少年らし

い見栄から、実力を遥かに越える「難問集」に挑戦していた私は、先生のお目にはあの頃どう映っていたのでしょうか。今思い返してみて、当時の「無料」添削指導を心から有り難く思いますとともに、先生に対する私の途方もない甘えを、何とも申し訳無く、また、恥ずかしくも思う次第です。恐らく、こうした添削指導の経験を共有することになった方々は、日比谷には大勢いらっしゃったのではないか、とも思い、私がこの経験を共有していることを、今は、誇らしくまた喜ばしくも思っております。

さて、昭和二十八年日比谷高校を卒業、東大理科一類の試験に落ちて、私は大学浪人の生活に入りました。日比谷高校ではその年、旧制最後の上級生に比べて如何にも力不足だった新制中学卒業の私たちの学年のためを考えて、「補習科」を新設して下さいました。当時の校長は菊池龍道先生でした。私は、あの補習科に一年間通いました。夏を過ぎると補習科などの模擬試験での私の成績は伸びて、順位も上位になることがしばしばとなりました。日比谷では私の経験になかったことだったので、それまでの自信の無さが裏返しとなり、過ぎた自信を持つようになったのでしょう、そして、傲慢にもなったのだと思います。これなら、東大も落ちるはずはない、などと密かに思うようになりました。昭和二十九年春受験、そして失敗、電文は「サクラチル」でした。まことに見事に落ちました。内実は、ひ弱な学力しかもっていなかったのですから、不調なら落ちるのが当然だったのです。東大一校しか受けていなかったので、浪人はただちに確定しました。いえ、家は、借金取り数人が毎朝押しかけてくるような惨憺たる状態でしたから、浪人させてもらえるかどうかも分からない状況でした。

そして、『ダンボ』を見に行ったあの日のことは、先の手紙に書いた通りです。それにしても、先生は、私が落ちたことをどうやってお知りになったのでしょうか。思いもかけず突然、先生は、私を訪ねて来て下さったのでした。映画へのお誘いにあたふたと出掛ける用意をする間、ふと二階の窓から見た、電柱の脇に立って待っていて下さった先生のお姿が私の目の底に焼き付いています。しかし、過信と傲慢さから東大を落ちたお蔭で、あの日、先生に日比谷映画劇場の『ダンボ』を見に連れて行っていただく貴重な機会に恵まれたのでした。そう考えると、あの時落ちたことも、また、有り難いことのようにも思われて来ます。家は困窮状態にあり、予備校などに通う経済的余裕もなく、働きに出る母に代わって妹弟三人の食事の世話などをしながら、自宅で独習する浪人二年目が始まりました。自己流の料理の仕方も覚えました。その経験が、後の留学の米国生活で、そして、今、単身赴任の盛岡で役立っています。

真砂町（文京区）の先生の清和寮に何回かお邪魔したのは、その頃でした。お部屋は廊下の突き当たりの辺りだったでしょうか、廊下の左側に位置し、入ると、狭いお部屋の真ん中には、かなり大きなオランダ・フィリップス社のオール・ウェーブ・ラジオが置かれてあり、その脇に、その頃は珍しかったオート・チェンジャーのLPプレイヤーが置かれていました。そのオート・チェンジャーは、キャビネットではなく、購入した時のボール紙のケースに入ったままでした。先生の機能第一主義の質素なご生活に感心しました。カラヤンのベートーベンを聞かせて下さったのを覚えています。お一人の生活のこととて、時間を節約して、掃除は普段なさらないらしく、床には綿ごみがふわふわと浮いているようでした。ベランダの戸を開けると、風が吹き込んで来て、その綿ごみ

は、廊下側の戸口の方へふわふわと飛んで行き、ひとりでに部屋から出て行くのだとおっしゃって、先生は、たいへん愉快そうにお笑いになりました。私も、なるほどと、一緒に笑いながら感心したものでした。

私は、家の経済状態をよく考えて、大学では数学科に進み、先生のように高校の数学の教師となり、数学の勉強と研究を一生続けることを考え始めていました。当時の私の先生への憧れと傾倒がこのことによく表れています。あの部屋で、私の将来についてのそうした希望を述べ、先生にご相談しましたら、先生は「自分の天職が何かということを知るのはとても難しいことだよ」とだけおっしゃって、直ちには、反対も賛成もなさいませんでした。私は、君は数学の教師には向いていない、と言われたかのようにも感じて、少しがっかりしたことを覚えています。それと同時に、「天職」という言葉が強く印象に残りました。ああ、岡田先生は、ご自分の「天職」に生きていらっしゃるのだ、と思ったことでした。今、私は思います、岡田先生は、素晴らしい「天職」を生きたお方なのだ、と。

次の年の東大受験は、余裕をもって順調に進めることができました。そして、やっと憧れの東大の理科一類に合格。二年浪人で、二十歳の春でした。前の年に見事に落ちた経験がありましたから、もはや、私に驕りは残っていませんでした。素直に静かに喜ぶことができました。先生に心ばかりのお礼の贈り物をしたく思い、手紙を差し上げ、幾つかの候補を挙げて、その中から選んでいただこうとしました。ていねいなお言葉のお返事のはがきで、先生が選んで下さったのは、実用品ではなくて、新潮社から出たばかりの世界文学全集『ジャン・クリストフ』の三巻でした。「敬愛する

岡田章先生」という文字を、何回も練習してペンで書き入れたことを、思い出しました。先生は、恐らく「貧者の一燈」とでもお考え下さったのでしょうか、快く受け取って下さいました。快く受けて下さったことを、今でも本当に有り難く思っております。

駒場の生活、入学直後の浮かれた気分が落ち着いて冷めてみれば、余りにつまらない授業が多く、私には全くの幻滅でした。理科の授業の多くがそうでした。数学、物理、化学……、私が興奮させられるような授業はなかったのです。有名教授もそうでない教授もその点では同じでした。一方的に、学生に分かるはずもないような難しい内容の講義をする物理の先生。黒板に先生が数式を一杯に書く。学生は、何も分からないまま、ただただ夢中になってそれをノートにひたすら丸写しする。そういう拙劣な授業が横行していました。そうかと思えば、教科書をそのまま棒読みする先生もいらっしゃいました。あの先生方は、研究者としてはきっと優れていらっしゃったのでしょう。が、教師としてはまったくの落第だったと、私は思います。全国から集まった選りすぐりの秀才たちを平気でどんどん駄目にしていった先生方だった、と。それに休講の多さにも、事情を知らない私は、最初は呆れておりました。

が、それにも直ぐ慣れました。そして、授業をサボって、渋谷などで映画を見て歩くようになりました。当時の料金は、二本建、三本建で五十円、そんな映画館を選んで、日、米、仏、独、伊、露……の映画を手当たり次第見て歩きました。当時の私は、授業からよりも映画からより多くを学ぶことになった、と思います。受験までの浪人中の二年間で、映画は『ダンボ』と『陽のあたる場所』の二本しか見ていませんでした。まるで渇きを癒すかのように目茶苦茶に見て歩きました。恐らく、私の文科的なものへの無知もあったからなのでしょう、文科の授業の中には、私が興味をそ

そられる授業をたくさん見つけました。次第に、自分は理科には向いていないのではないか、と思い始めました。そして迷い悩みました。私の理一・六Bのクラスから文科に移った学生は比較的多く、私を含めて少なくとも四人はいました。同じような思いをもった級友たちがいたということなのでしょう。

さて、本郷への進学を決める時期がやってきました。もしここで軽率に決めてしまうと、浪人で二年間を既に費やしていた私には、もうやり直すことが許されない、と思いました。家の経済に幾分の余裕が生まれて来たこともあったので、留年し、一年をかけて将来の進路選択をゆっくり考えることにしました。両親の許しも得ました。そうそう、駒場の理科の授業にも唯一楽しい授業があったことを思い出しました。それは、後にオレゴン大学教授になった、ハンサムで若々しかった久賀道郎先生のお授業です。でも、それは、留年を決め、私が文転を決心した後の発見でした。私が気持ちを変えるには、既にもう遅かったのです。留年中の一年は、駒場で、理科一類のカリキュラムにはこだわらずに、一人で全く自由にさまざまな授業を選んでは聴講して歩きました。実に楽しかった日々でした。登録せずに聴講だけさせていただくのですが、私の気ままな放浪風の受講の申し出を、講師の先生方はどなたも心地よく許して下さいました。留年して初めて、駒場での勉学を心から楽しみました。

あるとき、ちょうど時間が余っていたので、「九大」と呼ばれていた大教室でやっていた授業を覗いてみました。三木安正という大柄な助教授の先生による、教職科目「教育心理」という授業でした。当時の言葉で、「精神薄弱児教育」の専門の先生でした。何回か聞き入るうちに、その授業

にすっかり魅せられ、「心理学」を学ぼうと思い始めました。映画の影響もあったのでしょう、自然科学の研究ではなくて、生きている人間の現実の研究に強い興味関心を抱き始めていたのでした。少し高尚めかして言えば、パスカルの言う「幾何学の精神」から「繊細の精神」への移り行きを私は経験していたのだとも、今にして思います。進学先を、この三木先生のところに、つまり教育学部教育心理学科に決めようか、と思い始めました。でも、教育学部は当時、駒場からの進学定員が一杯にはならない、生まれたばかりの伝統のない、不人気な新しい学部でした。

ご存じのように、駒場の学生は、本郷に進学する際には進学希望先を申し出て、駒場の成績の平均点の良し悪しで、ちょうど入学試験の時のように、所属学部学科に受け入れられ、振り分けられます。自分の点数が低く希望先であふれると、希望先には進学できず、どこか、より点数の低い学科に進学させられることになります。大勢の不本意進学者が出たり、留年者が増えたり、進学した後の本郷学部での不適応学生を生んだりすることにもなります。で、若い駒場の誇り高き学生たちの多くは、周囲への見栄もあって学科の専門の内容などはともかく、進学振り分けの点数の高いところへ行き、自分の成績の良さを誇示したがるという風潮がありました。この東大生らしい風潮は、もちろん現在でも続いており、東京大学の駒場の教育の、ひいては東大全体の教育の堕落を生んでいることは、先生もよくご存じの通りです。私も、その風潮の真っ只中に生きていました。そして、文学部の心理学科のほうが振り分け点数が大分高いので、やはりそちらに進もうか、と考えつつあったのです。

ちょうど、そうした大事な進路決定の時期に、偶然、神保町の当時の都電の停留所で、先生にば

ったり出会うことになりました。あの時のこと、先生は、覚えていらっしゃいますか。ご無沙汰していて、しばらくぶりでしたので、偶然の再会を二人は（と書いても宜しいでしょうか）喜び合いました。先生は、すぐ停留所の前の「いろは寿司」に誘って下さいました。長年のお付き合いで分かったことですが、普通の人なら喫茶店に入っておしゃべりをするような場合に、先生は、寿司屋さんによく誘って下さいました。寿司を食べ、大きな茶碗にたっぷりお茶を注いでもらい、ゆっくりと話をしました。昼食の時間ではありませんでしたから、店は空いていて、時間をゆっくりとってもお店の迷惑にはなりません。邪魔になる周囲の客もいません。そして、その時の私の最大関心事である、本郷進学のことに話は自然に向かいました。

私は、数学科に進学することは止めて、心理学科に進みたい、とお話しました。すると先生は、まず数学科に進学して、卒業してからなおその気持ちが残っていたら、心理学を専攻しても遅くはないのではないか、とおっしゃいました。私は、二年浪人し、一年留年し、なお一生の仕事にしようとは思わなくなった数学に二年間の時間を費やすことは、心も進まず難しいと思うことや、家庭の事情についての私の思いなどをお話しました。先生は、とても残念がって下さいました。それから、心理学科を選んだ経緯をお聞きになりました。そして先生は、きっと、若い私の浅はかな虚栄心を見抜かれたのでしょう、こうおっしゃいました。そういう経緯なら、教育学部の教育心理学科に進学するのがよい、と。先生の力強いお言葉は、私には影響力を持ちました。こうして、駒場からの進学者が定員にも満たない、駒場では「底抜け」などと呼ばれて、振り分けの最低点などもない「不人気学科」だった教育心理学科に、私は進学しました。

あの選択は適切だった、と今の私は思います。教育心理学科は、当時の動物心理学、知覚と学習

の心理学中心の心理学科とは異なり、教育における人間の研究が中心でした。両学科の間のそんな明瞭な区別にも無知で、しかも、進学点数の高低へのこだわりからも解放されていなかった当時の私の浅はかさを、そして、私の生きていた駒場に支配的だった点数にこだわる雰囲気の愚かさを、改めてありありと見る思いがいたします。あれは、私にとって運命の岐路ともなった、重要な偶然の再会と先生のご忠告でした。大事な時期に先生と偶然出会うという、不思議とも思える出来事が、それから幾度も起こることになりました。「いろは寿司」での再会は、そのひとつでした。

教育心理学科への進学は簡単に決まりました。「いろは寿司」の再会からしばらくして、ちょうど進学直前の駒場での最後の試験が近づいていた時期に、本郷のキャンパスで、またまた偶然、先生にお会いしたのです。御殿下グランド脇の丘のあの岩に二人して腰掛けて、いろいろお話する内に、私はこんなことを申しました。「どうせ」定員に満たない学科なので、進学決定については何の心配もない。で、期末試験で駒場の平均点が下がっても何の問題も起こらないので、今度の試験は自由に本を読んで楽しんで、試験は適当に単位だけ取るつもりです、と。

すると、先生はおっしゃいました。駒場最後の試験なのだし、本郷の先生方は、学生の駒場の成績の良し悪しを気になさることがある。最後の試験は決して手抜きをせずに、平均点も下げないようにしたほうがよい。しっかり勉強して受験しなさい、と。

私は、一方で、自分の希望の学科に進学しながら、駒場での勉学を、進学に必要な平均点の程度に合わせて調節しようとしている自分の姿に、先生のお言葉で気づかされ、おおいに恥じ入ったものでした。ご忠告にしたがって、手抜きせずに駒場最後の試験を受けました。大分後になって分かったことなのですが、そのお蔭で、駒場の平均点は、最終的には辛うじて「優」となっていました。

そして、そのことが後になって、私にある「幸運」をもたらすことになったのです。

本郷の二年の間、先生の清和寮が大学に近いこともあって、お目にかかる機会が増えたように思います。先生のご依頼で、原彪先生の衆議院選立候補の選挙運動を手伝うアルバイトをさせていただいたことがありましたね。先生に連れられて、文京区の原先生のご自宅に伺って、ご紹介を受けたことも思い出します。先生と原先生とのご縁については、私は何も知りません。ただ、その時のご様子で、先生が原先生をたいへん尊敬していらっしゃることが、私には感じられました。私にはそれで十分だったのです。岡田先生への恩返しのような思いもあって、お手伝いを喜んでさせていただきました。そこで日比谷の一年先輩の方々ともお近づきになりました。いろいろな経験をしました。先生は今、そちらの世界で原先生と再会なさって、日本の現状について憂い、静かにお話ししていらっしゃるのでしょうか。

教育心理学科の二年間は、瞬く間に過ぎました。卒業の近づいたある日、学部事務室から電話がかかって来て、学部長室に出頭するように、との連絡を受けました。そして、学部長先生から、卒業式で卒業生総代として答辞を読むべきことを伝えられました。その当時の私にとっては、東京大学はやはり大きな存在でしたから、身の引き締まる思いがいたしました。昭和三十五年春の卒業式では、安田講堂の壇上で当時の茅誠司総長と対面して、卒業に際しての、自分の思いと考えを述べる答辞を読ませていただきました。若い日の、懐かしい思い出のひとつです。実は私が卒業生総代となったのは、駒場最後の試験で手を抜くな、との先生のご忠告のお蔭でもあったに相違ないのです。あの御殿下グランドでの出会いが、私の人生に一つの大きな意味を持ったことになります。

その後に、大学院へと進学して、教育心理学研究者としての道を歩むことになりました。あれは、恐らく私が修士一年の時の春休みだったのではないでしょうか。だとすると、一九六一年の春だったことになりますね。先生の愛車ナッシュで、後に東大の天文学科の先生になった同級の上条文夫さんと私を、京都と奈良の旅行に連れて行っていただきました。

東京オリンピック以前のことで、東名高速道路がまだ無い頃でした。途中、先生は、運送トラックが沢山止まっている食堂のトン汁はおいしい、ということを教えて下さいました。運転手さんたちが集まっていること自体が、トン汁のおいしい場所だということを教えてくれることになる、と学びました。東海道をさらに西に向かいました。

あの時の、左ハンドルの外車で追い越しをすることの恐ろしさについては、上条文夫さんがその回想（一九九四年秋発行の昭和二十八年卒業生による文集『坂道』に所収）に既に詳しく書いています。右前座席に座っている私が「先生、いいです」と言います。すると、前を走っている車の追い越しが始まり、スピードを上げ、ぐーっと右の車線に移り始める。その直後、対向車線を大型トラックがフル・スピードでこちら目がけて真っすぐ向かって来るのが見え、あわてて私が「だめです」と大声で叫びます。すると先生が、ハンドルを鋭く左に切って、元の車線に戻る。そのことの繰り返し。途中、何回追い越しをしたことだったでしょうか。追い越しレースのスリルに富んだ旅でした。京都・奈良に着くと、ちょうど、日比谷高校三年の在校生の修学旅行と重なっていて、その大型バス数台と即かず離れずの観光旅行となりました。生徒さんたちの様子から、先生が在校生の尊敬と人気の的であることが、私たちにもよく伝わってきました。あの時の生徒さんたちは、一九六二（昭和三十六）年卒業の皆さんだったことになりましょうか。

普通の旅行では行けないところに行こう、とおっしゃって、奈良の原始林に連れて行っていただきましたっけ。鬱蒼とした原始林をナッシュで巡りました。宿もナッシュでした。在校生たちが泊まっている宿の近くの道路に車を止め、前の座席の背を後ろに倒すと、広いベッドになり、三人で毛布にくるまって寝ましたね。とてもぐっすりよく眠れました。在校生たちが泊まっている京都の宿に押しかけて行って、お風呂に入らせてもらいました。宿に泊まっている在校生たちが、先生に親しげに話しかけて来る様子が、今でも目に浮かびます。他の先生方の中には、何故、岡田先生がそこにいらっしゃるのか不思議に思われた方もおいでのようでした。

三人で、京都・奈良を食べ歩きました。先輩や同級生たちの噂話もいたしました。東大と慶大の学生気質の違いも伺いました。例えば、東大では互いに足を引っ張り合う、慶大では皆で引き立てる、と。琵琶湖にも行きました。天気のよい、暖かな日差しの日でした。帰途、名古屋駅の駐車場に車を止めて宿としましたね。広い駅前駐車場の真ん中にポツンと私たちの車が止まっていて、そこで寝るのは、京都の宿とは違ってどうも少し落ち着かない感じがしたのを覚えています。先生は、女物の紫色の長細く大きな革のハンド・バッグをいつも大事に持っていらっしゃいました。貯金通帳など、大事な書類が総て入っている、とおっしゃいました。大きなハンド・バッグを、女物であることなど少しも気になさらずに便利だからと平気でお使いになることに、形には少しも囚われない、機能第一主義ともいうべき先生のライフ・スタイルが端的に表れていました。あの数日間は、実に楽しく懐かしい、思い出深い旅となりました。

日比谷の後輩に当たる、衣笠善雄さんのことにも、思い出があります。先生のご紹介で、衣笠さ

んの家庭教師のアルバイトをすることになりました。衣笠さんが高校一年生の時だったかと思います。日比谷の生徒さんらしく、育ちが良く、真面目でおとなしく、素直で実に教え易く、また教え甲斐のある生徒さんでした。二年の浪人生活を要した私とは違って衣笠さんは、無事、ストレートで東大理科一類に合格なさいました。そして、衣笠さんとのお付き合いは、先生もご存知のようにその後、現在まで続いています。先生のお世話で、このような一生のご縁ができたことをたいへん有り難いことと思っております。

それからの二十数年、いろいろなことがありました。私は、フルブライト留学生として米国イリノイ大学大学院で三年間を過ごしました。一九六七年に博士号（Ph.D.）を取り、六八年、ニューヨーク州のコーネル大学に研究員として、私は初めて就職をして一年間を過ごしました。六九年、お茶の水女子大学助教授になり、七二年母校東京大学の教育学部助教授に迎えられました。そして、昨年の一九九五年春、満六十歳で、二十三年間の母校東大での勤務を終え、直ちに岩手大学教育学部に教授として迎えられました。同じ年の五月、東京大学名誉教授の称号をいただきました。二十三年の間、先生には本郷の研究室にしばしばお寄りいただきました。田無の公務員宿舎にもお出でいただいたこともあり、その際、先生のオリンパス・ペンで、家族の写真を撮っていただいたことが、今は懐かしい思い出となりました。

折にふれて、さまざまなご忠告やお教えをいただきました。何か非常に困ったことが起こると、先生が姿を現されて私に大切な忠告をして下さる。そのような出来事がしばしば起こりました。先生の無私なお気持ちからのご忠告は、ちょうど私が高校生だった頃のように、心から素直に聴き入

り、私の人生の選択に活かすことができたのです。そしてそのことを、心から有り難いことだと思っております。

そして……。これから書きますことは、実は、思いもかけず、先生との最後の出会いとなってしまったあの夜のことです。私の個人的なことが含まれていて、誤解を招く恐れも大いにあり、書くことが躊躇されるところもあります。書くか書かぬか迷います。が、意を決して、正直に私の思いを書かせていただくことにしようと思います。

ある時期から、先生もお年を召され、私も五十を過ぎ、互いにいつこの世の別れとなるやも知れぬ、と私は密かに思うようになりました。そこで、あの衣笠さんと連絡し合って、いつか岡田先生と三人で夕食をご一緒しようと相談し、計画していました。でも、それは直ぐには実現せず、それからさらに月日が過ぎ去って行きました。そして、その計面がやっと実現したのは、一九九二年十二月十八日のことでした。衣笠さんのお世話で、池袋の中華料理店に三人が集いました。実に楽しい晩餐の一時でした。いつものように、先生は、お酒は召し上がらず、ちょっと口を湿らすだけでしたのに、私たちといったら、楽しさの余り、すっかりいい気分になって、はしゃいでいました。三人の写っている写真も、貴重なものとなりました。

食事を終えて、そのままお別れするのは如何にも名残惜しく、せめて「二次会」だけでも、ということになりました。どこか、池袋西口の地下の飲み屋さんでした。衣笠さん、岡田先生、私と三人で並んで、元生徒の私たちだけが飲んでいました。衣笠さんが、高校時代の岡田先生は怖かった、などと思い出を楽しく語りました。私は、ほろ酔い気分も手伝って、半ば冗談めかして、こうお尋

ねしました。

「特別に出来る生徒ではなかった私に、お目をかけて下さったことをたいへん有り難く思っています。でも、私は、先生の目からご覧になって、どんな生徒だったのですか」

すると先生は、思いも掛けないお答えを下さったのでした。

「入学試験で、君は理一（東京大学理科一類）の六番だったのだよ。教育学部では、君が行った時、たいへん喜ばれた筈だ」

――私は、余りにも意外なお言葉に、一瞬、思わず息を呑みました。しばらく、言葉もありませんでした。すっかり酔いも冷めてしまい、しばらく黙ってしまいました。先生が、それを、どのようにしてお知りになったのか、なぜ、その時まで私に伝えて下さらなかったのか……幾つも伺いたいことがありました。が、私は、内心いささか動転して、そのようなことをお尋ねすることはできませんでした。

あのお言葉は、私にとって余りにも意外だったのです。いわば自分の出自（生まれ）がそれまで信じ切って来たこととは違う、と告げられたようなものだったのです。先生が、お酒を召し上がっていらっしゃらなかったので、冗談をおっしゃったのではない、と私は信じています。また先生は、そのようなことについて、冗談をおっしゃるような方ではありません。すると、あれは事実だったのですね。そして、それから、いろいろ思い返して見ると、確かに先生のおっしゃることに符合する当時の状況が、たくさん思い出されて来ました。先生は、その事実を知りながら、三十数年の間、本人の私には絶対にお告げにならなかった。そのことに私は驚きました。そしてあの時から、先生のおっしゃったこと、そして、その事実の意味を、私なりに時折考えるようになりました。

ご存じのように、私は、二年間浪人しました。で、入学の時も、当時のあの誇り高き「理科一類」には辛うじてやっと入れたのだ、と心から思っておりました。確かに、入学試験の時余裕をもって受けられたということはありました。でも、それは、その年の入試問題が少し易しかったからに過ぎないのだ、と思っておりました。全国の秀才たちを集めていた難関の東大、その難関中の難関であった「理科一類」です。私のような鈍才は、たとえビリではないにしても、どうせ、せいぜい中位、と思っていました。世の中には上には上があるもの、という思いを日比谷でいやという程、植え付けられていたからです。実際、東大に入ってからも、周囲の学生たちは、誰も彼もが我こそは東大一の秀才なり、天下の秀才なりといったような顔をして、駒場キャンパスを闊歩していました。日比谷は、天下の日比谷ではあっても、やはり東京の一高校に過ぎません。東大は、全国の高校から秀才たちが集まっているのだ。そう私は考えていた、と思います。それに、私は前年に落ちて、二浪してやっと入ったのだ、という引け目を感じていたようなところもあったのです。

もし、入学当時、先生に「君は、理一の六番だったよ」と告げられていたらどうだったでしょう。恐らく、若い私は、そのことから生まれる誇りや過信に、そして、驕りや虚栄心に大きく左右されて、今とは異なる人生を選ぶことになっていたかもしれない、と思われて来るのです。確かにそんなことは愚かなことですし、滑稽で恐ろしいことでもあります。でも、やはり、そんなことが恐らく現実には避けられなかっただろう、と私は思います。

いやはや、五十八歳にもなってから、二十歳の時の自分について全く知らなかった秘密を、あのような形で、先生から教えられることになろうとは全く思いも及びませんでした。逆に、五十半ばを過ぎてからも、そんな昔の瑣末なことにこだわるなんて滑稽だ、とお笑いになる方がいらっしゃ

るかもしれません。そして今の私は、その方々に心から同意したい、と思います。確かにまったく滑稽なことです。でも、恐らく、私の人生が変わっていたかも知れないということも、また私にとって、真実なのです。

東京大学の卒業生、いわゆる「東大卒」の肩書は、日本では最高の学歴として、世間では通用するようです。「東大卒」と思われていた人が、実は「東大卒」でなかったと分かったら、どうでしょうか。逆に、そうでない、と思われていた人が、実はそうだと分かったらどうでしょうか。その人に対する世間の見方は、随分変わるだろうと思います。でも、「東大卒」ということが、そんなに大変なことでしょうか。私は、長年のもろもろの大学と東大での経験から、いろいろな大学のうちで、東大生が一番勉強しているなどとは、全く思っていません。東大には、確かに優れた真面目な人々が多く集まっています。でも、驕りや傲慢さからか、在学中、怠惰に過ごしている人々はたいへん多いのです。そして、まあまあの適当な勉強しかしなくても、卒業は十分できるのです。

それから、また、東京大学の内部には、学部の間に暗黙の上下関係の意識が根強く存在している、ということがあります。例えば、A学部がB学部よりも程度が高いとか、ある類の進学先が、別の類の進学先よりも、水準が高いとか低いとかいったような事柄に関して、抜き難い差別感と偏見が、東大内部で密かに、しかし広く支配的なのです。そして、その差別感の根底にあるのが、実はあの入学試験の合格最低点の高低の差異なのです。いくら滑稽に響こうと、それが現実です。その延長上に、私自身が惑わされた、進学振り分けの駒場平均点の高低による差別感があります。

それはともかく、「東大卒」の学歴とは、実は、あの「入学試験」で合格したか否かの違いを表

すレッテル以上のものでもないし、それ以下のものでもない、と私は考えるようになりました。その価値は、「それ以上でもないし、それ以下でもない」のです。大学での勉学は、個人によりさまざまです。大学で勉強しない学生には「入学試験合格証明書」を出してもよいが、「卒業証書」は出さないことにすべきだ、という珍説を私は唱えたことがあります。その位、入試こそ厳しいけれど卒業は易しい、というのが、元駐日米国大使のエドウィン・O・ライシャワーさんも書いていたように、東大を含めた日本の大学の全般的な実情のようです。

そうした諸事情を考慮すると、この鈍才の私にも、「理一の六番」などという、私自身さえ想像しにくいような凄い秀才であったことが、たった一度にせよあったのだ、ということは、まったく無意味なことではないようにも思われてくるのです。大袈裟に言えば、若い時にオリンピックで一度入賞するだけの記録を出したことがあるのに、そのことを自分では少しも知らなかった、という状況と似ているような気がいたします。そして、五十半ばを過ぎるまでそのことを知らなかったことが、善かれ悪しかれ、私の人生をほかならぬ今あるものにしている、ということに気づいたのです。もし、仮にそのことを若い時に知っていたとしたら、私の人生は変わっていたかもしれない。その時々の岐路での選択が、これまでに為してきた選択とは、幾分か異なるものになっていたかも知れない。もっと、傲慢になって他人に嫌悪されるような人物になっていたろうか。あるいは、もっと自信ありげな堂々とした人物になっていたろうか。いや、もっと社会的に有意義な優れた仕事ができていただろうか。あれやこれや、ロマンチックな夢を描いたりして、少し楽しくもなりました。そして、敬愛する岡田先生が、あの夜まで沈黙を守り、その鍵となる情報を黙って握っていら

っしゃっていたこと、そのことに私は驚きを覚えたのです。

先生はあの時、恐らく、いま明かさなければ明かす時を逃すかもしれない、とお考えになって、明かして下さったのかも知れません。現在を生きる私自身の在り方を、私が肯定し、受け入れる以上、先生が、長年にわたって、その情報をそっと秘密にしておいて下さったことを、感謝すべきなのだ、そう思うようになりました。先生は、私が過信や傲慢になることを防ぐために、沈黙を守っていらっしゃったのでしょうか。いや、あるいは、先生は、私に限らず誰にせよ、そうした情報を漏らすべきではない、とお考えになって、胸の奥深くしまって、厳格に沈黙を守っていらっしゃったのかも知れません。そのどちらであったにせよ、私には、先生のあの沈黙は、私が人間として驕りと傲慢と堕落して行くのを防ぐ働きをもつことになった、と思います。そのことを深く感謝申し上げたい、と思います。

あの夜、池袋でお別れしたのが、先生にお目にかかる最後になりました。またいつかと思いながら、いつでも、どこかで偶然にお会いできるかのように思って、必要な努力を怠ったために、ついに再会を果たせなくなってしまいました。それであのお言葉は、私にとって、先生の「遺言」ともなってしまいました。私は、あの「遺言」を「自信を持て、手抜きはするな」というお言葉として、これからも大切にして参りたいと思います。

先生の思い出はまだまだ尽きません。この手紙は少し長くなり過ぎたようです。四十数年の思い出を数十枚に書くことは所詮無理なことです。ここで止めておくことにします。

現在、私は、宮澤賢治の故郷の岩手県・盛岡市に単身赴任で来ております。受験浪人時代同様に、

また、米国留学生時代同様に、自炊生活をしています。先生のあの清和寮のお部屋を時折思い出しています。その度に先生とのご縁、そして、先生のご恩を思うのです。

私は、東大ではヘッポコ学部の「ヘッポコ教授」で終わりました。教育という人間的営みを理解することは、たいへん難しいことです。教育科学はまだそれを果たすだけの力を備えていません。戦争を廃絶する力を人類の諸科学が備えられないでいる以上、そのなかの教育科学の力不足も、あるいは当然のことなのかもしれません。私に分かったことはその位のことでしかありません。でも、生徒一人ひとりに人間として接するお姿、教育というお仕事を「天職」として自ら生きた先生の教育者としての「知行合一」のお姿は、私の人生に大きな影響を与えました。恐らく、日比谷で先生に学んだ多くの方々は、さらにさらに素晴らしい影響を受けて、今日の日本の社会の善き部分を形作っていらっしゃるに違いない、と私は信じております。私は、残念ながら高校の数学教師にはなれませんでした。が、先生のお姿から、「天職」としての教師とその教育の在り方を学びました。先生との出会いは私の一生の宝です。

四十三年間にもわたる長い年月のお付き合い、本当に有り難うございました。いずれまた、私も近く参りますそちらの世界のどこかの街角で、偶然ばったりお目にかかることになる日を楽しみにしております。

安らかにお眠り下さい。さようなら。

一九九六年九月

敬具